チャットGPT

2023.5.3毎日

民主主義に試練

新井紀子氏に聞く

国立情報学研究所
社会共有知研究センター長・教授

対話型AI（人工知能）「チャットGPT」が急速に普及しているが、その功罪を巡って世論は割れている。どう向き合えばよいのか、AIの専門家に聞いた。

チャットGPTに注目が集まっている。人間以外のものが人間っぽく言語を生成するという意味では人類史的出来事だ。しかしチャットGPTを使ったことのない人は自分の名前を入れてみて、どのぐらい間違っているかを確かめてみてほしい。その内容を誰かが信じてしまうことを想像してほしい。おそらく「怖い」と思うのではないか。

チャットGPTは、高度な自然言語処理能力を持つ「大規模言語モデル」に大量のデータを学習させることで、人間と見分けがつかないくらいスムーズに文章を作る。しかし出てきた結果が正しいとは限らない。膨大なデータから確率に基づいて出てくるもので、意味を理解して作られた文章ではない。追求しているのは「もっともらしさ」で、「正しさ」ではない。

正しい情報のみから学習すれば、チャットGPTが100％正しい答えを出せるようになる、との誤解があるようだ。しかし、研究でAIは自然言語処理の過程でハルシネーション（幻覚）を起こす可能性があることが分かっている。正しい情報だけから学習しても偽情報が出てくるのだ。チャットGPTの「答え」が確率と統計に基づくものである限り、正しさについては今後も保証されることはない。

「偽情報」疑わぬ危うさ

チャットGPTの答えが間違っていても、それが分からないくらい正しく見えるので、理解や分析をする力（リテラシー）が不足していると「正しい」と思ってしまう。それで日常生活に支障がなければ、チャットGPTに疑いを持たなくなる。そうなるとリテラシーの高い人と低い人との間で分断が起こる。

ネット検索から問題の解決方法を見つけるには、情報の出所を確認することなどで、信頼度に軽重をつけていく作業が必要だ。チャットGPTはその過程を経ることなく、もっともらしい結果を出してくれる。実は圧倒的多数の人々は思考の過程よりもタイムパフォーマンス（時間対効果）を重視し、即座に答えを得ることを欲している。チャットGPTはそのニーズに応えている。

既存のメディアは出来事とその問題点を一覧にして提供し、報道は世の中に共有されてきた。チャットGPTだけに情報収集を依存すれば、答えが正しいかどうかは別にして、知りたいことだけを手軽に知ることができる。そうすると知りたくないことや知りたいと思っていなかったことについて接する機会はどんどん少なくなり、正しい情報は共有されなくなって、みんながバラバラになってしまう。みんながAIを通じてそれぞれの好きな情報だけに接し、しかも情報の正しさを気に留めなくなった時、民主主義は成り立たなくなる。

自分がよく知っていることに関する下書きにはチャットGPTは使える。専門知識があればチャットGPTの答えに間違いがあるかどうかはすぐに分かる。自分がよく知らないことには使わない方がいい。高い安全性や信頼性、真実性が必要なことには使ってはいけない。このまま多くの人がチャットGPTを自分の知らないことを知るために使うと、世の中が混乱して、元通りにするためには膨大なコストがかかるかもしれない。よく考えて使ってほしい。

【聞き手・木下訓明】

=北山夏帆撮影

あらい・のりこ　1962年生まれ。一橋大、米イリノイ大大学院を経て、東京工業大で博士（理学）取得。専門は数理論理学など。人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」を主導。著書に「AI vs.教科書が読めない子どもたち」「AIに負けない子どもを育てる」（いずれも東洋経済新報社）など。